

愛媛県愛南町における地域連携プロジェクト：
愛南町における生活習慣とメタボリックシンドロームとの関連

○江口依里¹⁾、下江由布子²⁾、中川菊子³⁾、七條加奈²⁾、朝雲杏里²⁾、丸山広達⁴⁾、坂本和美³⁾、幸田栄子³⁾、木下徹¹⁾、古川慎哉¹⁾、斉藤功⁵⁾、谷川武⁶⁾、三宅吉博¹⁾

- 1) 愛媛大学大学院医学系研究科公衆衛生・健康医学
- 2) 愛媛大学医学部医学科
- 3) 愛媛県南宇和郡愛南町役場保健福祉課
- 4) 愛媛大学大学院医学系研究科統合医科学
- 5) 愛媛大学大学院医学系研究科健康科学・基礎看護学
- 6) 順天堂大学大学院医学研究科公衆衛生学

1. はじめに

愛媛県には、県庁所在地である松山市から遠く離れた漁村・農村や離島が多く存在する。これらの地域では、いずれの地でも高齢化率・過疎率が高く、医師不足が深刻な問題となっている。また、若手医師の確保や医療・保健・福祉体制の整備だけでなく、疾病予防や、高齢者が「病院以外の場で」快適に暮らしていくための日常生活の質を上げるための環境整備も同時に求められている。これらを推進する上での問題として、若手医師・保健師や医学生・看護学生を含む都市部の医療従事者や大学関係者が離島・漁農村部の医療の現状を知る機会が少ないことや、地域特性に富んだ各地域が抱える、医療の現状を把握するための調査が不十分であることが挙げられる。離島・漁農村が抱えている医療問題は、愛媛県全県、さらには日本全体が近未来に直面する問題であり、愛媛大学医学部は愛媛県において本問題の解決に取り組むことが期待されている。そこで、われわれは、愛媛県愛南町及び上島町と連携し、同地域において、「漁農村における医学生による地域保健医療の実践活動（愛南町）」、「島で（死まで）生き抜く環境づくりに関する調査及び、島民のQOL改善のための介入研究（上島町）」という2つの活動を地域連携プログラムとして実施し、県内の離島・漁農村部における医療・保健・福祉問題の解決方法を公衆衛生学的アプローチにより模索することを目的とした。

2. 地域連携プログラム概要

愛媛大学医学部生を対象に、愛南町、及び上島町における社会医学実習を平成24年に開始した。社会医学実習は毎年6月～11月に実施され、両町共に平成26年度で3年目の実施を迎えた。愛南町における社会医学実習では、現地の病院およびNPO法人と連携し、当該地域の保健指導等（精神疾患やメタボリックシンドローム・高血圧）への従事や、健診会場等の施設訪問を通じて地域住民と接することで、学生が地域保健医療の社会的な問題点についても考える機会を得た。さらに体験から疑問に思ったこと、改善したいことについて、学生たち自身で考え、検討する機会を設けた。また、平成24年度より、毎年8月に開催している「愛南町の医療を考える会」では、合計150人前後の学生が愛南町を訪問した。会では、愛媛大学医学部の教員、地域の病院医師、看護師、町の保健師らと交えたパネルディスカッションを行い、当該地域の医療の現状や、医師としてのやりがい等について、学生に情報を提供した他、交流会を開催し、町のスタッフや、医療関係者と意見を交し合うことにより、愛南町との交流を深めた。

社会医学実習では、愛南町役場保健福祉課を訪問し、役場の保健師・スタッフの話を聞いたり、愛南町の特定健診・特定保健指導のデータを確認した。その結果、愛南町において、メタボリックシンドローム該当者が愛媛県内の他市町村と比べて多いことが明らかになった。そこで、愛南町におけるメタボリックシンドロームに関する課題を今後の取り組みにつなげることを目的として、メタボリックシンドロームと生活習慣との関連について縦断的に検討した。2008-09年にS協会で健康診査を受診し、必要な情報のある40～79歳の男女1,463人を対象とし、2008-09年のベースライン時と2012年の生活習慣及び、メタボリックシンドロームとその構成項目について対応のあるt検定およびマクネマー検定により比較した。また、喫煙、運動、食事、飲酒の生活習慣について、各生活習慣の無いものに比較してあるもののメタボリックシンドローム発症の年齢調整及び多変量調整オッズ比を算出した。メタボリックシンドロームの基準は、必須項目の肥満「男性85cm以上、女性90cm以上の腹囲」に加えて、選択項目の脂質異常「中性脂肪150mg/dl以上またはHDLコレステロール40mg/dl未満」、高血圧「収縮期血圧130mmHg以上または拡張期血圧85mmHg以上」、高血糖「HbA1c5.6%以上」の3つの内、2つ以上該当した場合とした。また、高血圧・脂質異常・高血糖には、それぞれの服薬者も含めた。多変量調整はBody Mass Index、喫煙習慣、飲酒

習慣、運動習慣、高血圧、高血糖、高脂血症について調整した。

解析の結果、ベースライン時と2012年の比較では、生活習慣では現在喫煙、飲酒習慣、朝食を抜く者の割合が有意に減少し、検診成績では収縮期血圧と拡張期血圧の平均値はともに有意に低下していた。一方で、高血糖者、脂質異常者の割合は有意に増加した。平均3.8年後の追跡調査において、109人のメタボリックシンドロームが発症した。メタボリックシンドロームの発症要因を検討した結果、喫煙習慣がある者はない者に比べてメタボリックシンドローム発症のオッズ比が高く、多変量調整オッズ比(95%信頼区間)は3.54(1.91-6.56)であった。就寝前2時間の夕食が週に3回以上であることもリスクを高める傾向があった[1.58(0.88-2.84)]。以上より、愛南町住民の生活習慣については、喫煙者、飲酒習慣者、朝食を抜く者の割合、に改善が見られ、健診成績では血圧値が低下した一方で、高血糖者、脂質異常者に増加が見られた。さらに、愛南町におけるメタボリックシンドロームに関連する要因として、喫煙、及び夜遅くの夕食が考えられ、引き続き対策が必要であると考えられた。

本プロジェクトの中で社会医学実習、及び愛南町の医療を考える会で実施した取り組みを通じて、医学生が活動に従事し、地域活性のみならず、人材育成にも寄与でき、研究の実施や活動を通して、町の医療従事者や地域の住民とともに地域保健医療について考え、健康問題を解決するための保健指導等に取り組む機会を提供できた。実際に地域に足を運び、学生のうちから地域保健医療について考える経験は、将来、愛媛県内において地域保健医療に貢献する人材づくりの面においても有用であると考えられる。また、大学と地方自治体、ならびに地方自治体にある病院、NPO法人が一体となって、取り組んだことも特徴の1つである。大学の教員である公衆衛生・地域保健医療の専門家が構成員に加わることで、プロジェクトの成果が町の保健医療の課題対策に直結し、町の事業の推進に資するための有用な資料として活用されている。上記の活動を通じ、医療系学生の離島・漁農村部での医療に対する認識の変容、特に将来的に医師の初期研修や後期研修の場として選択肢となる可能性が高まることは、愛媛県が抱える医師偏在化の問題解決の糸口になると予想される。また、若手医師が離島・漁農村部の医療に従事することにより、同地域の今後の保健医療従事者や医療機関の活性化も期待できる。さらに、愛媛県の地域の保健医療従事者が、地域毎の住民の健康状態や医療体制についての課題を把握し、疫学的に調査すること、さらにそれらの違いについて把握することで、少ない医療資源の有効的な活用法や、新たな保健指導方法の開発等、今後の効果的な医療施策につながる事が期待できる。以上から、本プロジェクトは、愛媛県が全県的に抱える保健医療問題の早期発見、早期対処を行うために必要な情報提供と人材育成に寄与できるという点で意義があり、今後もこのような活動の継続実施が望まれる。

【謝辞】

本研究を実施するにあたり、多大なご支援をいただきました、愛南町町長及び愛南町役場保健福祉課の皆様は厚く御礼申し上げます。

本研究は、平成25年愛媛大学地域連携プロジェクト支援「愛媛県内の離島および漁農村地域における医療保健・福祉問題対策における官学連携プロジェクト」の助成を受けて実施いたしました。

(江口依里 eri_eguchi@yahoo.co.jp)